

つかしみながら語って時を過ごしていた。

あゝ、今は亡き羽柴さん、厚い信仰に生きる誠実清廉な人であった。こんな善い人は今の世にはめずらしい。ありし日の羽柴さんの面影を偲びながら御冥福を祈るのみである。

ありし日の羽柴先生を偲ぶ

多 田 太郎 吉

(会員・佐伯市青山黒沢)

私は故あって佐伯市稲垣区にある龍護寺の観音様に七十年間、月参りをしています。羽柴先生はお寺の近くのお方で、早くからご懇意の間柄でした。

先生は大分合同新聞をご愛読なされており「灯」の欄へ度々投稿されておられましたので、深く感銘購読致していました。私方も久しく合同新聞を購読致しており、時折り「読者の声」欄に浅学ながら投稿しております。

十五年前のことです。先生があなたは合同新聞読者の声欄に度々投書されておられるが、佐伯史談に昔のことでも何でもよいから投稿されてはと、申してくれましたので、折角のご好意を無にするのは失礼と思い、まだ史

談会にも加入していなかったのですが、有難くお受けしました。

「西南の役と黒沢」と云う題で原稿をお送りしましたところ、特別寄稿で採用してくれました。これがきっかけで史談会にも加入させていただきます、今日までお世話になっており、有難いことと先生を尊敬致しております。

先生のご功績の数々をあぐればつきるところがありません。文化財の調査、史跡めぐり、研修旅行など参加させていただき、普通の旅行とは異なり感無量の思いが致します。

また黒沢にはほとんど毎年のようにご苦労下され、殊に惟治公の霊を祀る富尾神社に、四百年來継承されています神踊杖踊（県指定無形文化財）にはご協力下され、夜間の練習にもかかわらず遠路わざわざご足労お励まし下さいました。昭和五十年十月五日九州地区民俗芸能大会が、佐賀県武雄市で開催、県代表として出場の際も厚きご援助を賜り、県代表としての重責を果し得ることのできたことも思い出されます。

龍護寺（佐伯氏の菩提寺）観音堂の改築につきましては、檀家のない寺だけに、地元の方々は申すまでもなく、人

望高い先生の粉骨砕心のご尽力には頭がさがります。

いつまでも長生きしていただきたかった先生の死は、惜しみても余りあることと存じますが、生者必滅会者定離で、天命とあきらめるほかはありません。

先生は決してなくなつたのではありません。生前の人格ご功績は庶民の心の中に生き、いつまでも感化を与え導いて下さることでありましょう。

何卒安らかにごめい福の程お祈り申します。

忘れ得ぬ人

御手洗 一 而

(会員・川越市)

先生は人間の髪みげにあやしい光沢をもつ不思議な人でした。

山を愛し野花をめで、吹きよせるそよ風にそつと手を出す。田畑を耕して土に親しみ、小川で鰻と戯れ、人間をこよなく愛して、書齋に入ってペンをとる。こう書けば、一見、どこにでもいる好々爺に見える。

私はその一人の先達に魅せられたのは何であろうか。それは単なる人間性というよりも、一口で言えば「歴史

の顔」である。

歴史といえば、故きを温なねがちであるが、現在社会では作られつつあり、未来へは始動の日々である。この一連の時間帯のどこにでもとびこめるのが先生であった。

「御手洗君。弥生時代の米作りはこうやったもんだよ。中世の庶民は、こうやって土間に藎むしらを敷いて寝たもんだよ」

ごろっと土間に寝ころんだ先生の声が、今にも聞こえそうである。

「見る。聞く。ために歩き。遺す」

それが、自然に天性の勤めのように、神の思召しのように、日々繰り返された。

それは、何学の範疇はんちゆうに入らない、いわば、森羅万象学の自然体に見受けられた。

「理屈はいゝじゃないか、御手洗君。古代から先人の生活があつてこそ、理論や体系づけが芽ばえるんだよ。とにかく精一杯生きることから始めよう」とでも言いたげに。

先生は、「生活史」という「歴史そのものの顔」をもつていた。その点では、単なる学者や研究者のような整